

〔平成三十年度研究会活動報告〕

モンゴル佛典研究会

研究会代表 阿部 真也

本研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究する事を目的としています。現在は、二十五年前から続いている『モンゴル仏教史』モンゴル語原本のローマ字転写、翻訳および訳注をおこなっています。この写本は、かつて橋本光實師によって訳された『蒙古喇嘛教史』（原文チベット語）のモンゴル語写本であり、その研究はまだ学界において、さしたる成果は出ていません。これまでの研究会の成果は、「大正大学総合佛教学研究年報」の第十八号（平成八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（平成十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成二十五年三月）、第三十六号（平成二十六年三月）、

第三十七号（平成二十七年三月）、第三十八号（平成二十八年三月）、第三十九号（平成二十九年三月）、第四十号（平成三十年三月）に掲載されています。また、大正大学総合佛教学研究所の助成金によって、『モンゴル佛教史』研究〔一〕（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔二〕（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔三〕（二〇一二年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔四〕（二〇一五年三月、ノンブル社）の四冊を出版しました。また、最終巻が近々出版される予定です。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

使用するテキストはモンゴル語の写本ですが、チベット語版は、ドイツ、日本、中国で三種出版されています。チベット語版からの翻訳としては、ドイツ語訳、日本語訳、モンゴル語訳、漢訳があります。それらを随時参照しつつ読んでいきます。

モンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタームを巡るものです。テクニカルタームのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献

の性格等を推測する手がかりになるものと思われます。また、人名等の音写語に異なる表記が非常に多くある、という問題もあります。次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

本文献は政治史と仏教史の二部構成となっております。仏教文献としての特徴あるいは問題点については、これから明らかにしていく所ですが、何点か挙げておきたいと思えます。まず、チベットの仏教学者(サキャパンディタ)の格言、インドの龍樹の言葉、仏陀の言葉、諸経典からの引用がしばしばある事です。サキャパンディタの格言以外は出典が不明なものも多く、今後精査を行っていく必要があります。次に、仏教語の音写が、チベット語からとサンスクリット語からのものの二通りある点です。教理内容と合わせて検討の必要があります。

本年度の主な研究会の活動

- ・毎週火曜日…18時～20時位、研究会
- ・日本モンゴル学会に参加(春季、H30・5・19 早稲田大学。秋季、H30・11・24神戸大学)

今後の予定

毎週火曜日…18時～20時位、研究会

場所…大正大学史学閲覧室

頼瑠撰『真俗雜記問答鈔』訳注研究会

研究会代表 小宮 俊海

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑠僧正（一二二六～一三〇四）が、その時々記したものを集成した著作である。その内容は一千三百二十余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項はもとより、頼瑠自身の夢記や和歌、さらには公家に対する修法や諸家との書簡、和歌論や世典に関する記事など、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、中世を生きた頼瑠の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までも窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。

本書は古来より三十巻・二十四巻・十一巻など種々の説があり、また写本によって巻順の異同や内容の増減が著しい。すでに『真言宗全書』第三十七巻に、高野山南院松永有見師蔵写本を底本とし、二十七巻本の体裁をもつて活字化されているものの校訂テキストとして未だ不十分とされる。

そこで本研究会は各所の諸写本を聚集し校訂し、なかでも巻数の揃った最も古い写本である智積院新文庫蔵本を底本として【本文】を作成し、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二十五冊のうち、整理番号・新文庫三十一―四―（二十五―）に相当する一冊の冒頭部分（二丁裏～六丁表）である。本書は、外題に「真俗雜記卷四」とあり、内題は「秘蔵口伝鈔第四」とある。この「秘蔵口伝鈔」という名称はその内容に起因するものと考えられるが、外題との関係性については今後の課題である。

これらも勘案し、本書を「巻第四」と定め、今回報告する冒頭部分を仮に「巻第四ノ一」とした。巻第四ノ一に収録される条目は次の通り。

- ・ 慈恩釈云事
- ・ 第七住心無相離即俱過失事
- ・ 一道之乘馳三駕文一道者一道歎事
- ・ 以羊鹿牛喻三乘事
- ・ 唯蘊迷無性事
- ・ 他縁阻境智事
- ・ 作論義於兩方有三說事
- ・ 兩方論義二用同題俱將如何可云耶事
- ・ 進難問者取牒歎事
- ・ 初論義作過之時先沙汰之歎事
- ・ 論匠隨喜導師作法事

本年度は以上、十一の条目について各担当者を振り分け、研究会において本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。今後も次年度以降引き続き訳注研究を進め、「巻四ノ二」を順次発表発行予定である。

近世唱導文芸研究会

研究会代表 北林 茉莉代

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世唱導関連文献の翻刻および研究を目的としている。当面の目標は、大正大学図書館蔵本『類雑集』を広く学界に紹介することである。『類雑集』は近世に編纂されたと目される唱導資料であり、版本は「慶安四年¹⁷⁴⁹正月吉辰 石黒庄太夫板本」の奥書を持つものと、「明暦三¹⁶⁵⁷酉年三月吉辰寺町通圓福寺前町秋田屋平左衛門板行」の奥書を持つものの二種がある。どちらも、全十巻および総目録一冊の計十一冊で、同じ版木で刷られている。版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。活字化されていない『類雑集』の翻刻作業は、非常に有意義であるといえる。

本研究会では、平成二十三年度から『大正大学綜合佛敎研究所年報』に一巻ずつ翻刻を報告してきた。また、翻刻作業と同時に、引用文献の調査ならびに校合を実施している。翻刻掲載時には、脚注に典拠名と校異を示した。また、資料の状態を忠実に再現するため、書き入れの場所や内容を指摘している。

今年度は、総勢十人の会員を中心に研究会を運営し、巻九の翻刻を行った。その結果、平成三十年度『綜合佛敎研

究所年報』に『類雑集』巻九の翻刻と出典考証を掲載することができた。ただし、「雑語門」には、出典が明示されていない例が多かったため、翻刻担当者だけでなく、もう一名が文献調査および関係各所との交渉に当たった。その結果、西教寺文庫蔵『菩提鈔』『南岳大師御詞云』『千観内供八ヶ条起請』の翻刻を許可していただいた。また、今回の報告には間に合わなかったが、ほかにも引用書と考えられる書物を所蔵する機関へ、閲覧依頼および資料掲載許可依頼を出している。許可が下り次第、順次報告していきたい。

『類雑集』は国文学研究者において、以前より資料的価値が認められていたにもかかわらず、活字化されていないことにより、研究が進んでいない資料である。一刻も早く『類雑集』全巻翻刻を達成し、近世における唱導書のあり方について、研究展望が拓けるようにしていきたい。

「大学と宗教」研究会

研究会代表 松野 智章

本研究会は、「大学と宗教」を研究テーマとして掲げ、平成二二年四月に発足した研究会であり、今年度で第三期の二年目（一期三年）を迎えている。研究進捗情報を報告し合う研究会を随時開催してきたが、そのうち主な研究報告を行ったのは以下の通りである。

【研究報告会（二月）】

- ・松野智章（東洋大学）「相対主義と正しさの喪失という時代について～大学で宗教をどう扱うのか～」
 - ・小柳敦史（北海学園大学）「戦後京都大学のキリスト教 学講座について」
 - ・武井順介（立正大学）「仏教系大学の僧侶養成の実態について」
 - ・齋藤崇徳（大学改革支援・学位授与機構）「キリスト教系大学の聖職者養成の実態について」
- 【研究報告会（八月）】
- ・高橋原（東北大学）「臨床宗教師制度の現状と課題、展望について」
 - ・山梨有希子（大正大学）「宗教文化士の現状と課題、展望について」

- ・岡田正彦（天理大学）「宗教系大学（天理大学）における建学の理念教育について」
- ・藤本頼生（國學院大學）「戦後の神職養成と神道系大学について」

また、本研究会が主体となつて平成三〇年九月に開催された日本宗教学会第七七回学術大会（大谷大学）で研究発表パネル「大学内宗教者養成の歴史・制度・実態に関する調査報告」を実施したが、そこでの発表担当は以下の通りであった。

- ・江島尚俊 「統計調査からみる戦後日本の宗教系大学」
 - ・藤本頼生 「國學院大學・皇學館大学における神職養成について」
 - ・武井順介 「大学はいかに僧侶を養成するのか～仏教系大学の養成とその類型～」
 - ・齋藤崇徳 「キリスト教系大学における聖職者養成～制度比較にもとづく分析～」
- さらに平成三〇年十一月には、佛敎文化学会（大正大学）におけるシンポジウム「僧侶養成の歴史と展望～大学教育の現場から～」において本研究会の成果を問うた。そこでの発表担当は以下の通りであった。
- ・江島尚俊 「現在日本における宗教系大学の動向」
 - ・元山公寿 「真言宗智山派における僧侶養成について」
 - ・柴田泰山 「浄土宗における大学内僧侶養成について」

宗学者の視点から」

・安中尚史「日蓮宗の僧侶養成と立正大学」

・山岡三治「カトリック司祭の養成機関としての上智大
学神学部の使用と課題」

本研究会では、現在、『シリーズ大学と宗教Ⅲ 現代日本の大学と宗教』（仮）を刊行すべく、研究会メンバーが各々研究を進めている。次年度内には刊行をできるよう今後も精力的に研究活動を進めていく予定である。なお、刊行作業と並行して、「大学と宗教」研究を世界的な視野のもと発展させるべく、下準備も行っている。研究会有志をメンバーとして、十一月には科研費への助成を申請した。同時並行ではあるが、「大学と宗教」研究がより実りのある成果を提供できるよう、一丸となって努力してゆきたいと考えている。

室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表 大橋 雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。澄円は横尾山で三部の密灌を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観蒙から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。

具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。そのため、本研究会参加者各

位がそれぞれの問題意識のもと個別に研究を進めている。

平成二九年度までの共同研究では、翻刻・書き下し文・語注作成を行っていたが、作業速度の効率化を図り、平成三〇年度、第三巻からは書き下し作業のみとし、注も典拠の確認のみとした。その結果、第三巻、第四巻の書き下し作業を終了した。なお、本『年報』には紙数の都合上、前号未掲載だった第二巻の残り第三巻分のみを中間報告として掲載した。

残念ながら、本年度は本研究会のテーマに関する個人研究発表を行うことができなかった。

次年度の共同研究では、引き続き第五巻以降の書き下し作業を進め、個人研究についても精力的に口頭発表や研究論文の発表を行っていきたくと考えている。

また、これまでに行ってきた研究作業データを再整理し、出版に向けた準備も順次進めていきたい。

〈参加メンバー〉

代表者	大橋 雄人		
参加者	吉水 岳彦	郡嶋 昭示	舍奈田智宏
	工藤 量導	岩津 英資	杉山 裕俊
	長尾 隆寛	安孫子稔章	勝崎 裕之
	後藤 史孝	前島 信也	春本 龍彬
	星 俊明	青木 篤史	長尾 光恵
	里見 奎周	峯崎 就裕	

中世東国仏教研究会

研究会代表 大八木 隆祥

当研究会は中世東国仏教の実態解明を目的に発足したものであり、現在は神奈川県立金沢文庫保管 国宝・称名寺聖教の写本『仙芥集』（一三函一―一〇―三三）の翻刻を進めている。『仙芥集』は鎌倉時代の真言僧である定仙（二二三―一三〇二）の受法記録を、定仙の弟子の智照がテーマごとに編集したものである。

当研究会では昨年度までに一三函一―一から二〇までの二十冊の翻刻を終えており、本年度は二一から二七までの七冊を翻刻し、これを今号に掲載した。

以下、本年度翻刻分の概要を記す。

①一三函一―二一「金剛界口伝」

奥書によれば、定仙により建治三年（二二七）二月五日に記されたものであるが、誰の口伝かは記されていない。本文の記述から推察するに勸修寺流の金剛界次第についての口伝か。記述は簡略で達意的であるので、已達向けの伝授であつたと考えられる。

②一三函一―二二「胎藏界口伝」

巻中識語には阿闍梨や法流の名は見られないが、「健治

三年二月九日記之了」とあることから、前の一三函一―二二『金剛界口伝』と一具のものと考えられる。

③一三函一―二三「三寶院駄都次第口伝」

三寶院流の駄都法と両界について意教上人頼賢の口伝を記したものである。ただし、定仙が頼賢から直接受法したものではなく、頼賢の伝を受けた別の人からの伝聞として記されている。受法時期と本冊執筆時期から、義能と公然から聞き及んだ頼賢の口伝を中心に記されたものと考えられる。

④一三函一―二四「瑜祇灌頂私抄」

『瑜祇経』に基づく特殊な灌頂「瑜祇灌頂」に関する口伝を集成したもの。本文から、勸修寺流の増瑜と定祐、金剛王院流の能海から受けた瑜祇灌頂についての口伝を記したものであり、また共に勸修寺流の覚宗の資である願行房憲静と殿法印良宝の伝については受法ではなくただ聞いた話として記したものであることがわかる。また、永仁四年（二九六）九月二日に定仙の住房である鎌倉亀谷新清涼寺釈迦堂において、定仙が同法四人に対して瑜祇灌頂を授けたことも記されている。

⑤一三函一―二五「ho ma 要抄」

本冊からの三冊は護摩についての口伝である。本文の記

述からは勸修寺流の口伝を中心に、ところどころ余流の伝と比較していることがわかる。内容は表紙裏に「指環事／作壇事〈付楨五色〉／破壇事」とある通りである。執筆時期と内容、また他冊との関連から、憲静が相承する勸修寺流榮然方の伝を中心として記されている可能性が高い。

⑥ 一三函一—二六「ho ma 要抄〈行海〉」

前冊と同じ「護摩要抄」というタイトルであるが、前冊が作壇作法や破壇作法、あるいは指環といった護摩の行法以外についての口伝を記したものであったのに対し、本冊は表紙裏に「行事／八千枚／不審条々」とある通り、勸修寺流の護摩の行法そのものについての口伝を記したものである。前半一〇丁表までが護摩の行法について正応六年（一二九三）二月に記されたもの、一〇丁裏からの八千枚護摩の口伝となる。前・後半ともに本文中には「卿阿闍梨」と多く記され、卿阿闍梨増瑜の口伝を中心としていることが窺える。一方で、諸師、諸流の伝も記され比較されている。

⑦ 一三函一—二七「ho ma 私記」

本冊は、前冊の一〇丁表の奥書までの文章と全同である。

以上七冊をもって本年度を終えた。来年度は本年度翻刻分に続く二八から、最終帖となる三二までの五本を翻刻し、『仙芥集』の翻刻を完了する予定である。

仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表 森 寛

仏教文化におけるメディア研究会では、古代インドの地域宗教として成立した仏教を世界宗教へ発展させたメディアの力と、諸媒体より生成された人間像と世界観をめぐる宗教表象について考察している。我々の取り組みでは、宗教表象に反映された時代や地域によって変容する思想、価値観、習俗、政治、経済、宗教といったイデオロギーなどの諸要因を読みとり、これらを内包する文化現象としての仏教が、いかなる媒体によってどのような宗教表象を生み出し、個人や集団に影響を及ぼしてきたのかについて明らかにする。それにより、メディアを通じて、宗教者や研究者にとどまらず世間一般の幅広い人々と繋がってきた仏教の社会的側面に光をあてたいと考えている。

仏教と社会のつながりについては、これまでにも経典や教理に関する文献学や思想史、ならびに仏教史、仏教美術史などの分野で、さまざまな指摘がなされており、膨大に蓄積されたその研究成果が今日における学術的言説の基盤をなしていることは言うまでもない。一方で、既存の学術領域からとりこぼされた事例もいまだ存在しており、近年は、このような対象に学際的な手法をもって光をあてようとする動きも生じている。その一つとして二〇〇〇年代か

ら最新の成果が報告され始め、新たな研究課題となりつつあるものに、メディアと表象が織りなす宗教文化に関する論考があげられる。

古代インドにおいて説かれたブツダの教えは、書物・絵画・塑像・建築・音楽などのメディアを通じて、宗教者や特権階級だけでなく、文字を読めない大衆の間でも広く受容され、世界各地に教線を拡大していく。そのプロセスでは、時代や地域によって異なる社会や習俗と接触し、時に反発と葛藤を生じさせながら文化的融合を遂げ、当初の形態とは異なる信仰形態が生じる。有史以来、人間が用いてきたメディアは、異文化圏を越境し、世界各地の風土や生活と交わることで、多元性を帯びていったこの仏教を、現在にいたるまで可視化し続けてきた。諸媒体は、媒介作用によって観念的な教理を身体的に認識可能な言語や形象とし、不特定多数の人々がその信仰に接する状況を実現した。だがそこで伝えられる内容が難解な教理教学ばかりでなかったことは、仏教を象徴し具現化する多種多様な表象が生成され、それにより新たな仏教徒が再生産されてきた歴史からもうかがい知れる。

本研究会が注視してきたのは、正にそうした世間一般の人々がメディアを介して接する仏教の表象であり、なかでも仏教に関連づけて説かれてきた人間像や世界観の宗教表象と、それを生成させてきた仏教文化となる。第二期目の研究活動が承認された現在は、この研究テーマをより具

体的なものにするべく仏教的人間像へと焦点を絞り、近代メディアが生成したブツダの表象について考察を試みている。近代は様々なメディアによって多くの人々が仏教に接した時代であり、そうした媒体から読みとれるブツダの表象は、仏教のみならず、思想、価値観、習俗、政治、経済、芸術などの文化的諸要因と関わり続けながら生成されてきた。そこで現状の課題としては、こうしたブツダの表象を考察することで、社会と仏教との接続により形成された文化的諸相を浮かびあがらせたいと考えている。

本年度は『ブツダの変貌 交錯する近代仏教』（法藏館）、『現代宗教二〇〇八 特集メディアが生み出す神々』（秋山書店）、『バラエティー化する宗教』（青弓社）、『シリーズ日本人と宗教 近世から近代へ5 書物・メディアと社会』（春秋社）、『イタコ』の誕生 マスメディアと宗教文化』（弘文堂）などのメディアと宗教表象に関する先行研究の読み合わせをし、また同時に、研究分担者も各自の論考課題を報告した。来年度は、本年度に意見交換したこれらの内容と共通認識をもとに、執筆した論文章稿を揃えた中間報告を実施し厳密な検証へ移りたい。

梵語仏典研究会

研究会代表 横山 裕明

本研究会は、大正大学の伝統的な梵語仏典研究を受け継ぐ研究会として、平成二十八年年度より従来の「声聞地研究会」・「律経研究会」・「サンスクリット修辭法研究会」という三つの研究会を一つに統合して始動した。これら三つの研究会の実体は研究グループとして保持しつつ、グループ間の行き来を自由にして研究者の活動の幅を広げることで伝統的学問の継承とさらなる発展を目指して研究活動に取り組んでいる。各研究グループは引き続きの内容として次の研究活動を行った。

まず声聞地グループ(昭和五十四年度より共同研究を開始)は、第一瑜伽処から第四瑜伽処までの全四章からなる『瑜伽論声聞地』の校訂テキストと訳註を作成している。平成二十九年度に「第三瑜伽処」の出版を終え、本年度より「第四瑜伽処」の校訂を開始した。本年度は『瑜伽論 声聞地 第三瑜伽処―サンスクリット語テキストと和訳』の發送作業を行うとともに、「第四瑜伽処」校訂の方針を検討した。その結果、すでに研究が行われている「第四瑜伽処」前半部の「世間道」については校訂の優先順位が低いと判断し、後半部の「出世道」の研究に着手した。現在は「出世道」の十六種事までの検討を終えたところである。

次に律経グループ(平成十四年度より共同研究を開始)は、平成十三年に出版された『チベット・ウメ字転写梵文写本集成影印版』に含まれる『律経』および『律経自註』写本の解読を進めている。本年度は、昨年度までに投稿した「律経の研究(10)」に続き「雑事(Ksūtrakavastu)」の解読を進めた。また、本年度は成都の四川大学において Luo Hong 教授と共に「The Second International Workshop for Guṇaprabha's Vinayasūtra」を開催した。このワークショップにおいては「律経」および「律経自註」の「破羯磨事(Karmabhedavastu)」について写本から内容を検討した。また、次年度については上海の復旦大学において復旦大学、四川大学、大正大学総合佛敎研究所律経グループの共催で「The Third International Workshop for Guṇaprabha's Vinayasūtra」を開催することを予定している。

最後に修辭法グループ(平成十九年度より共同研究を開始)は、全五章からなるヴァーマナ(Vamana)著『詩の修辭法の手引・註(Kāvyaṅkarastravṛtti)』のローマナイズと訳註を平成二十四年度より順次、当研究所年報に発表している。本年度は第五章の読解を進めてきた。「詩作への」使用について(prayogika)と称する第五章は、二つの課から成り、全一〇九のストトラから構成される。一七のストトラから成る第一課は「詩の慣習(kāyasamaya)」を主題とし、九二のストトラから成る第二課は「言葉の正確化(sābdasuddhi)」を主題としている。なお、第五章第

二課を正確に解説するにはサンスクリット文法学の知識も要するため、文法学に関する先行研究も併読している。サンスクリット修辞学に関する研究は、サンスクリット文献の厳密な解釈ならびに翻訳法の確立にも役立つことがこの一二年間の共同研究から判明しているので、インド・アリア語の原典を扱う幅広い分野の研究者に積極的な参加を呼びかけるものである。

密教聖典研究会

研究会代表 駒井 信勝

当研究会では、『不空羂索神変真言経』と『理趣広経』の二本の経典を読み進めている。

まず前者の方は、『不空羂索神変真言経梵文写本影印版』を基礎資料とし、対応するチベット語訳および漢訳を適宜参照しながら精読している。これまでの研究成果は、『Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśakalparāja (I) ~ (VII)』およびサンスクリット語校訂テキストの Preliminary Edition に試訳を加える形式で研究成果を報告した『Amoghapaśakalparāja: Preliminary Edition および和訳註(1)~(3)』として『大正大学総合佛教研究所年報』において報告している。

ところが、この方法では、全ての写本のテキストを報告し終わるまでに多くの年月がかかることが予想される。そのため、昨年度からは、『大正大学総合佛教研究所年報』への報告を一度中断し、担当者たちが各自残りの写本をテキスト化する作業を進めている。同時に、既に発表済みの箇所についても、同じ体裁でテキストの公開ができるように入力を行っている。

このようにして、一度経典全体のテキストを公開し、その後改めて、『大正大学総合佛教研究所年報』において、詳し

い内容を報告する予定である。

後者の方は、『理趣広経』の校訂テキスト作成とその読解を行なっている。

本経はチベット大蔵経において、前篇の「般若分」(Sṅparamādyā-nāma-mahāyanakalparāja)と、後篇の「真言分」(Sṅparamādyā-mantrakalpakhaṇḍe-nāma)に二分されて収録されているが、昨年度の『大正大学総合佛教研究所年報』において、前半部分に相当する「般若分」の校訂テキストの報告を終えることができた。

研究会では「真言分」に入り、現在は第八章のテキスト作成と読解を行なっている。

なお、本年度の『大正大学総合佛教研究所年報』には、『理趣広経』「真言分」第一章のチベット語訳校訂テキストを報告する。

今後も両経の全容解明を目指して文献学的研究を継続し、その成果を報告していく所存である。

仏教史料研究会

研究会代表 石井 正稔

当研究会は歴史学の立場から古文書や古記録といった仏教関係史料を取り扱い研究を進めることを目的として、平成二八年度より新規に立ち上げ二年間の助走期間を経て、平成三〇年度より本走入った研究会である。

本走期間でも、平成二八年九月に調査を実施した、真言宗豊山派金乗院（千葉県野田市清水）の史料調査および内容の整理作業を継続して進めている。

金乗院は、応永五年（一三九八）の開基と伝えられ、近世期には本寺と檀林の寺格を有し、近隣寺院を統括していた。そうしたことから、同寺には、檀林・本末関係などを示す史料群が多く残されている。同寺の蔵には古典籍を含む史料が多く収蔵されているが、これら金乗院所蔵史料は市史や県史などにも収められておらず、未整理の状態である。

昨年度までは文書・記録類を中心に史料整理を進めると同時に、研究会メンバーでデータの入力作業を分担して目録データを作成してきた。

今年度の主な活動内容としては、①目録の精度を上げる。②『大衆帳（交衆帳）』の入力。以上、二つの作業に着手した。

①について、作成した目録データの基礎部分は出来ており、【主題】【文書種類（形態の別）】【年月日】【奥付内容】【備

考】という五つの項目を立てている。

更にそこから精度を上げる為、目録の項目ごとに詳細な検討を加える作業（例えば、目録中の【文書種類】という項目で「書状」と分類されている文書がどのような「書状」なのかを判別すること。各文書に概要を加えること。枝番号を付与した文書の検討等）をおこなっている。

②について、研究会の立ち上げ当初より着目していた史料の一つである『大衆帳』は、文政年間（一八一八～一八三〇）の本山との交衆に係るもので、論議（報恩講）が実施される度に作成された名簿である。一覧すると、法臈の浅い者が年を重ねる毎に上座へと昇っていき、やがては名簿上から名前を消していることがわかる。同様に、上座において名前が消えた者でも、一定の期間を経ると再び名前が記載されており、そうした内容から金乗院を拠点とし在地において活動した僧侶の様子を垣間見ることができる。

『大衆帳』の作業も研究会メンバー全員でデータの入力を分担しておこない、作業は概ね終了している。今後はデータを統合しメンバー全員での解読できなかった文字を読み説いていく等の確認をおこなっていく予定である。

次年度も①・②の作業を進めていくが、一旦、『大衆帳』の作業を優先的におこない、年報等の紙面に掲載し、成果として発表できることを目指していく。

更に、取り扱っている史料の性質上、寺院の本末関係・檀林制度・移転寺制度といった近世新義真言宗史の実態に

ついでに理解を深めておかなければならない必要がある。
そうした知識の向上を図りながら研究会を進めていきたい。